

## 「行革甲子園 2018」エントリーシート

### 【取組の内容】

#### 1 取組事例名

I C Tを取り入れたハイブリッド図書館

#### 2 取組期間

平成25年6月1日開館（継続中）

#### 3 取組概要

まんのう町立図書館を新設するに当たり、「静かで落ち着きある空間から人が集まり活発なコミュニケーションができる空間」で、魅力のある「ハイブリッド図書館（紙媒体と電子媒体を組み合わせ利用できる図書館）」となり、かつ「効率的な運営とスペースの確保が可能となるよう」に、I C T（情報通信技術）を積極的に取り入れた。

#### 4 背景・目的

老朽化したまんのう町立満濃中学校の改築に合わせて、教育活動のほか生涯スポーツの拠点としても活用できるように町民体育館を、さらには町の活性化を図るための空間として、町民からの要望が高い図書館を生涯学習の拠点として整備した。

図書館については、I C Tを取り入れ、最小限のスタッフで最大限のサービスが提供できるようにした。

## 5 取組の具体的内容

○ICタグシステムの導入により、本の貸し出し手続きは、自動貸し出し機により利用者がセルフで行うこととした。なお、自動貸し出し機の利用方法が分からない利用者や、障がいを持つ利用者にはスタッフが対応する。



○電子図書館システム「Over Drive」を導入することにより、書架を節約した空間で読書席の確保や、地域の人が集まるスペースを生み出しコミュニティの推進を図った。また、利用者が借りた電子書籍は、返却期限になると自動的に返却されるため、返却管理や督促の必要がなく、スタッフの有効時間を生み出すことができる。



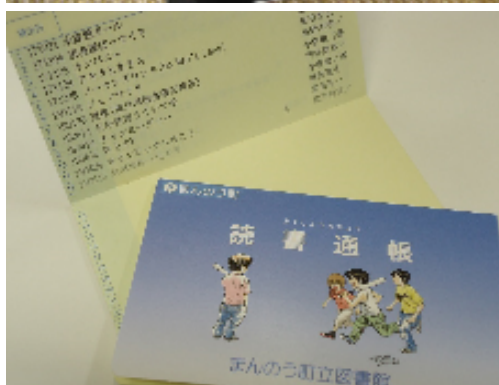
○電子書籍リーダー「kobo」を導入した。これは、電子図書館システムよりも更に簡単に利用できる形態を目指し、デバイスとコンテンツをセットにして貸出を行っている。ここでもコストを掛けないことを目指し、運営事業者が楽天株式会社と交渉し、開館時に100台の寄贈を受けた。館外貸出も可能とし、夏目漱石や宮沢賢治、島崎藤村等20人の作家、206作品の中からあらかじめインストールした上で貸し出している。



○アニメーションブックをインストールしたタブレット端末「Surface」は、絵本の一部が動いたり音声が出たりし、主に就学前の子ども等が楽しみながら物語に興味を持てるツールである。大型絵本やしかけ絵本に比べ、視覚的、聴覚的によりインパクトのある「動く絵本」は、子ども等の興味が増し、絵本を読むきっかけともなっている。



○子どもたちが図書館に来るきっかけづくりや、読書意欲の向上を目的として、読書通帳を導入した。読書通帳は銀行の預金通帳にそっくりで、館内に設置している読書通帳機にて借りている本の貸し出し日、タイトル及び著者名が印字される。町内の中学生以下の利用者には無料で通帳を発行し、それ以外の利用者には有料（一冊250円）で発行している。



## 6 特徴（独自性・新規性・工夫した点）

公共図書館における電子図書館システムの在り方は、現在でも確固たる方向性が定まっていない状況であるが、平成25年6月1日の開館時には、いっそう混沌としている黎明期であった。

開館時に大掛かりな電子図書館システムを導入してしまうことは、その後の技術進化やマーケットの変化に柔軟に対応することが困難になることから、初期投資の比較的小さい電子図書館サービスの導入から開始した。

開館当時は、タブレット等の端末機器が普及し始めた時期であったため、利用者がデジタルコンテンツに馴染めるよう、複数のツールを用意した。

また、書架や閲覧台の配置も工夫し、センターテーブルを幹とし、書架を幹から延びる枝のように配置することで、空間によるハイブリッドも創出している。

## 7 取組の効果・費用

自動貸し出し機によるセルフ貸し出しを100パーセント実現することで、同規模の図書館運営では5名から6名は必要なスタッフ数を、3名とすることが可能となった。

人数の削減に加え、スタッフの有効時間の確保ができ、その時間をレファレンス業務等に充てることが可能となった。

またセルフ貸し出しは、利用者にとっては借りる本をスタッフに見られることがなく、プライバシーへの配慮も実現している。

動く絵本は、子どもたちが読書に親しむきっかけとなり、読書通帳は、読破した図書の履歴が分かるとともに読書量が一目で確認でき、子どもたちの読書意欲をかきたてており、ともに子どもたちの読書活動の推進に寄与している。

## 8 取組を進めていく中での課題・問題点（苦労した点）

利用者の3割弱を占めている60歳代以上の年配の方々への周知と利活用の促進が課題である。

機器操作に不慣れなため、館全体のICT化に抵抗を感じている利用者が存在しているため、スタッフは、そういった方々の気持ちに寄り添い、紙媒体の案内を添えて、丁寧な対応を積み重ね、彼らの抵抗を興味に変えている。

## 9 今後の予定・構想

導入したツールを、小学校や中学校の授業での活用に展開することを検討している。

一斉読書など、多数の児童・生徒が同じ作品を読む場合には、「kobo」を使うことで、同じ図書を何冊も購入しなくても良い利点がある。また、同一作家の作品をインストールすることでコンテンツを統一することもでき、同作家の読み比べにも適している。

電子図書館システム「Over Drive」では、英語の絵本の読み上げ機能があり、平成32年度からの小学校の外国語教科化に対応した英語教育のツールとして、更なる活用の可能性があると考えている。

## 10 他団体へのアドバイス

本町立図書館は、その基本方針のひとつに、「デジタル化時代の到来に対応したサービスを展開する」ことを掲げているが、ICTは日進月歩であり、構想を練ったり導入を検討している間に取り巻く環境がどんどん変化していくものである。

様々な場面でのニーズを捉えながら、社会の動きにも敏感に反応し、サービスに反映していくためにも、先ずは一步を踏み出し、踏み出した後も、修正・改善と持続した整備が必要であると感じる。

## 11 取組について記載したホームページ

<https://www.manno-library.jp/>